

秋田の風土礎に多様な道を模索

文化放送アナウンサー 石川 真紀 (平成5卒)

「文化放送のアナウンサーって、ラジオのアナウンサーって、どんな仕事？」と問われる時、私は「自分の可能性を広げられるお仕事」と答えます。臨機応変、あらゆるジャンルの番組・催事に出演しますし、アナウンサーとはこういうもの、という枠もありませんので、以前は想像できなかった新たな自分に出会う日々です。

文化放送のAM波のサービスエリアは関東1都6県が中心ですが、現在はインターネットの同時放送「radioiko.jpプレミアム」を通じて全国でお聞きいただけるようになりましたし、私が担当する番組には「ニュースパレード」のように全国ネットでお届けしているものもあります。秋田のご出身で、現在は関東近郊で暮らす方々から、同郷というだけで親近感を抱いたという嬉しいお便りを頂戴したり、他方、出張先、旅行先から届くお便りを拝見していますと、移動の機会が増えるのに比例して、今後ますます慣れ親



いしかわ・まき / 1974年秋田市生まれ。早稲田大学政経学部経済学科卒業後、1997年文化放送入社。アナウンサーとして勤務後、2002年から2年間、報道部に記者として配属、警視庁記者クラブ、国会民放クラブ、司法記者クラブなどを担当。2004年よりアナウンサーに復帰。現在、「伊東四朗・吉田照美 親父熱愛」「ニュースパレード」「いとうせいこう GREEN FESTA」「林家正蔵のサンデーユニバーシティ」など、各番組を担当。

しんでいる物事への愛着を再認識する場面が増える予感がしています。

また、在京秋田県人新春交歓会の司会や、第29回国民文化祭・あきた2014の応援大使を務めさせていた。ただ、各所のご協力のもと、秋田の名産品のリスナープレゼントを展開する中で、この数年の間にブランド化とサービス向上の面で目覚ましい推進力を発揮されている様子を目の当たりにし、秋田の底力をひしひしと感じているところです。

愛する学び舎の後輩の皆さんには、将来どのような進路を選択されるにせよ、できることなら外国へ旅行、あるいは留学の機会を得るべく検討していただきたいと願っており、そして諸先輩方には、後進の皆さんが見聞を広められるよう導いていただきたく存じます。秋田の風土が培ってくれる大らかさを礎に、多様な中で自らの道を模索する力を、自他共に育んでいきたいと思っています。

ZOOM UP!



空を支える航空機タイヤ

ブリヂストンタイヤ実験部 耐久摩耗性能実験ユニット

布谷 和日湖 (平成11卒)

ブリヂストンへ入社し、初任配属が航空機タイヤの開発部門でした。

航空機部品なので絶対に安全を保障しなければならぬ、軽い気持で仕事はできないと大きな責任とプレッシャーを感じました。しかし、ほどなく官庁や機体メーカー、加えて弊社独自による耐久試験で十分な性能確認を実施して、安全な製品を自信を持って供給していることを身をもって知ることとなりました。それでも、航空機事故のニュースを見るときに社会的責任の大きさを再認識し、身を引き締めて仕事に臨んでいるところでした。

航空機タイヤは1本で大型トラック1台相当の重量に耐え、F1並みの速度まで達する極めて過酷な条件で使用されます。設計のちよつとした差で大きな性能差が生じることもあり、高い技術力が要求され、設計者としてとてもやりがいを感じます。

また、新製品の説明のため、米シアトルにあるボーイング社へ度々赴きました。会議前日の資料や説明内容の最終確認では言語の違いもあるため、十分に理解頂けるよう表現の一つ一つにも気を配り、気付くと夜が明けていることもありました。ボーイングの技術者から製品への称賛の言葉を頂いた時は、設計者として認められたようで非



ぬのや・かずひこ / 1980年、秋田市生まれ。東北大学大学院航空宇宙工学修了。2006年ブリヂストン入社と同時に航空機タイヤ開発部構造設計ユニット配属。ボーイング787型機など航空機用タイヤの設計・開発に心血を注ぐ。2014年から現職。趣味はランニング。今年の東京国際マラソンに出場、初のフルマラソンで見事サブ4を達成(3時間56分)。写真は秋高ラグビー部同期の仲間と。左端が筆者

常にくれしかつたことを覚えていません。主に開発を担当した最新鋭787-9型機でテスト機体でのタイヤ性能評価を提案した際、担当の方が熱心に対応してくれたため開発中の機体にもかかわらず、脚回りの調査だけでなく機内やコックピットにも乗せてもらい貴重な体験をさせて頂きました。機体開発のパートナーとしても認められ、よい信頼関係が築けたと実感した場面でした。

ところで先日、東京でラグビー部のOB戦が行われ、久々に懐かしい面々とプレーを楽しみました。苦楽を共にした仲間たち、仕事や人との関わりに対する姿勢はラグビーを通じて得たかけがえのないものです。これらを自分の拠りどころとして、これからも一層仕事に励んでいきたいと思えます。